マレーシア・サラワク州におけるインドネシア人労働者のインフォーマル化：在地アブラヤシ小農との関係から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-04-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, 裕美, 祖田, 亮次 メールアドレス: 所属:
URL	https://fpu.repo.nii.ac.jp/records/279

［研究論文］

マレーシア・サラワク州におけるインドネシア人労働者のインフォーマル化
―在地アブラヤシ小農との関係から―

加藤　裕美[1)]・祖田　亮次[2)]

Ⅰ　はじめに

マレーシア・サラワク州（以下サラワク）では近年，アブラヤシ産業の急成長に伴って，インドネシア人労働者が急増している。本稿はこの点に注目し，彼らのサラワクでの就労形態と，在地社会との関係性について考察する。

インドネシアとマレーシアとの間の人の流れは，植民地期以前も含めて古くから様々な形態がみられた。とくにマレーシアが経済的に急成長した1980年代以降は，インドネシアからマレーシアへの労働移動が，両国間の人口移動の主要な部分を占めるようになった。センサスによると，マレーシア全土における登録外国人数は1991年で約80万人（全人口の4.4％），2000年で約138万人（全人口の5.9％），2010年で約232万人（全人口の8.2％）となっているが，[1)] こうした公的な統計には表れない非合法の外国人労働者が相当数存在することは，マレーシア国民の間で周知の事実となっている。

ただし，非合法就労者も含めた全外国人の推計値は各機関によって様々である。たとえば1997年の金融危機直後の時点で，ヌガラ銀行はマレーシア全土に総計約170万人の外国人労働者（そのうち登録労働者は約64％）がいると推計していたが，あるNGOは200万人という数値を示していた［Abubakar 2012］。そして，2004年の時点では300万人の外国人労働者が存在し，その約半数は非合法であったという指摘もある［McCarthy and Cramb 2009］。

1980年代以降，マレーシアで最も多くの外国人労働者を受け入れていた州はサバ州（以下，サバ）であるが［Kassim 2005］，非合法も含めたその推計値は，やはり約59～78万人（1998年）という大きな幅があった［Abubakar 2012］。サラワクにおいては，2000年時点での登録外国人は約６万人で［Department of Statistics Malaysia Sarawak 2001］，非合法の滞在者を合わせても10万人前後にとどまっていたと思われる。

その後，2010年のサラワクにおける登録外国人数は117,092人［Department of Statistics Malaysia Sarawak 2015］と大幅に増加しており，2015年には約11万人の登録者数に加え，非

受付日　2022.11.01
受理日　2022.12.22
所　属　１）福井県立大学学術教養センター　２）大阪公立大学文学研究院

合法のインドネシア人労働者が約30万人存在するという新聞報道までなされた［Borneo Post 2015年３月13日］。こうした推計を見ると，サラワクにおける2000年以降の外国人労働者の増加には，目を見張るものがある。

サラワクにおける外国人労働者の特徴としては，インドネシア人がその大半を占めるという点にある。半島部では，1990年代以降に外国人の多様化が進み，1998年の時点では，インドネシア人が登録外国人の約65％を占めるものの，バングラデシュ人（約22％）やフィリピン人（約7％）の増加も顕著になっており［Pillai 1999］，こうした多様化は現在も進行している。一方，サラワクでは他州に遅れて2000年代以降に外国人の流入が増加した。サラワクの南側はインドネシアと国境を接しているため，2003年時点では登録外国人のうち約99％はインドネシア人が占めていた［Kassim 2005］。現在でもサラワクにおける外国人労働者の大半はインドネシア人であると推察される。[2] 新聞報道によると，近年のサラワクにおけるインドネシア人労働者の急増は，アブラヤシ・プランテーションの拡大によるところが大きく，とくに非合法の労働者の多くはマレーシアとインドネシアの国境バッファー・ゾーン[3] における非合法プランテーションで就労していると推定されている［Borneo Post 2015年3月13日］。[4]

一方，都市や幹線道路に近い低地のプランテーションでは，インドネシア人の非合法滞在に対する取り締まりが厳しくなっており，いまやパスポートや就労ビザを持たないインドネシア人を雇用することは，非常に難しくなっている。これは，2002年に強化された「移民規則 immigrant regulation」が，少なくとも都市近郊において実質的に運用され始めたことを反映しているものと考えられる。つまり，低地のプランテーションにおいては，外国人労働者雇用のフォーマル化あるいはオーソライズ化が進んでいるといえる。これは労働条件の改善を伴うものではあった。しかし，雇用のフォーマル化は労務管理の強化を意味するものでもあり，外国人労働者にとってはかならずしも居心地の良いものとは限らない［Pye et al. 2012］。実際，労働条件が改善されたはずの低地のプランテーションからも「逃避」するインドネシア人労働者は後を絶たず，彼らの多くはパスポートや就労ビザの有効期限が切れた後もサラワクでの滞在を続け，インフォーマルな存在となっていく。[5] このように正規就労先からの無断退職を，現地語では「逃げる」という意味のラリ（*lari*）という言葉を用いる。そしてここ数年，彼らの「逃げ場所」の選択肢のひとつとして重要な意味を持ち始めているのが，イバン（Iban）やカヤン（Kayan）などの内陸先住民社会である。

サラワク・アブラヤシ・プランテーション所有者協会（SOPPOA）事務局のMG氏は，サラワクにおけるインドネシア人労働者の急増は，国境沿いの非合法プランテーションの拡大が一因となっているという新聞報道を認めつつも，内陸先住民社会におけるアブラヤシ小農栽培の拡大も重要な要素として挙げられるという。現時点では地元住民によるインドネシア人の雇用数は不明であり，推計値すら得られない。アブラヤシ生産全体に占める小農の比率（2021年の

面積比で約15%）を考慮すれば，彼らが雇用するインドネシア人労働者の比率は決して高くないと思われるが，筆者らの2000年代から2010年代における調査から，その実数が過去数年で急増していることは確実である［Department of Statistics Malaysia Sarawak 2022］。

少なくとも雇用主である先住民の観点からすれば，持続的なアブラヤシ畑の経営にとってインドネシア人労働者の存在はもはや不可欠となりつつあり，今後もその需要は拡大し続けると思われる［Pye et al. 2012; Kato and Soda 2020; Soda and Kato 2020; Soda and Kato 2023］。[6] こうした状況を考慮して，本稿は，小農アブラヤシ栽培が盛んな内陸先住民社会における，インドネシア人労働者の就労状況や在地社会との関係性を明らかにすることを主な目的とする。

ここでアブラヤシ小農地域におけるインドネシア人労働者に注目する理由は，以下の通りである。これまで，政策的な側面からアブラヤシ部門における外国人労働者に言及した研究は数多く存在するが［たとえばFord 2006; McCarthy and Cramb 2009; Pillai 1999, 1998; Riwanto 2004; Saravanamuttu 2013; Stahl 1999; Wong and Anwar 2003; 新井 2021］，それらは主にプランテーション労働者を想定したものであった。しかし，現在のサラワクのアブラヤシ産業において，小農のプレゼンスが高まると同時に，小農や果房買取り仲買業者らに雇用されるインドネシア人が急増している。これは単にインドネシア人の就労先が多様化しただけではなく，別の新たな意味を持っている。従来，プランテーション内で生活のほぼすべてが完結し，在地社会にとってはほとんど目に見えない存在であったインドネシア人労働者が，小農アブラヤシ・ブームによって，在地社会においても目に見える形で増加し始めているということだ。外国人労働者の増加に対する懸念はさまざまな形で指摘されてきたが［Cooke and Dayang Suria 2013; Pillai 1998; Pye et al. 2012; Ramasamy 2004］，政府が最も警戒するのは，外国人の流入による在地社会の変容，あるいはCastles［2004］の言葉を借りれば，外国人とマレーシア人の「ハイブリッド化」という点にあった。

サラワクの在地社会において，インドネシア人はどのような経緯で入ることになったのか，インドネシア人と在地社会はどのような関係を切り結んでいるのか，小農アブラヤシ栽培が盛んな地域において，その動向を把握することは，サラワクにおけるアブラヤシ産業の展開と内陸先住民社会の変化を展望する上でも重要な意味を持つであろう。

以下では，次のような構成で議論を進める。まずⅡで，調査地の概要と研究の方法について記述する。Ⅲでは，サラワクの内陸社会におけるインドネシア人の就労実態を明らかにする。とくに，1970年から1990年代初頭にサラワクに滞在するインドネシア人の多くが西カリマンタン州サンバス地方出身のマレー（以下，サンバス・マレー）だった［Ishikawa 2010; Wendy 2014］のに対し，出身地や民族集団，出入国の方法や経路などが多様化している状況を示す。そして，彼らの就労履歴やプランテーションからの離脱経緯等について記述し，さらに，内陸在地社会および故郷との関係性について，いくつかの具体的事例を紹介する。その上でⅣにお

いて，インドネシア人労働者にとって，サラワクにおける小農アブラヤシ栽培の拡大がどのような意味を持っているのかを議論し，Ⅴで結論を提示する。

Ⅱ　小農アブラヤシ・フロンティアとインドネシア人労働者の需要

ここでは，調査対象としたビントゥル省（以下，ビントゥル）トゥバウ地域におけるアブラヤシ栽培とインドネシア人労働者の概況について説明し，本研究の調査方法について述べる。ビントゥルは，サラワクのなかで最も外国人労働者が多い省である。政府統計によると，2013年には30,400人が登録されており，その数は省人口の約16%を占めている［Department of Statistics Malaysia Sarawak 2015］。非合法就労者も含めると，この数は２倍以上になると思われる。ビントゥルにおける外国人労働者の雇用は，かならずしも近年みられるようになった現象ではない。1980年代から木材加工業や建設業などに従事するインドネシア人男性は数多く存在していた。また，飲食業や小売業，家事労働などの部門においてインドネシア人女性が雇用されることも多かった。しかしながら近年アブラヤシ産業が盛んになると，プランテーションをはじめとするアブラヤシ産業部門全体で相当数のインドネシア人が雇用されるようになった。

ビントゥルにおけるアブラヤシ栽培は，1990年代より政府系公社や企業によるプランテーション経営を中心に進められてきた。サラワクのなかでも近年とくに栽培面積が拡大しているフロンティアであり，沿岸部にはプランテーションとともに，多くの搾油工場や精油工場が操業している。

そのなかで，本稿で主な調査地としたトゥバウは，ビントゥルの内陸部に位置し，イバンやカヤンなどの先住民村落（ロングハウス）が点在する地域である（図１）。地理的には，州の

図１　調査地と調査対象者の出身地

出所：筆者の調査による

重要幹線であるミリ－ビントゥル道路から，内陸に向かう支線（バクン道路）沿いに位置する。このバクン道路の両側には政府系公社や企業が経営するプランテーションが点在するほか，都市在住の華人が内陸先住民の土地を非公式に賃借してアブラヤシ栽培を行う中規模農園（華人エステート）も存在する。さらにイバンやカヤンなど在地住民による小農栽培も盛んなアブラヤシ・フロンティアである［Soda et al. 2016］。筆者らが2011年以降にトゥバウで訪問したイバンとカヤンの22の先住民村落では，そのすべての村でアブラヤシ栽培を行っていた。また，2011年にトゥバウ周辺の11村210世帯で行った聞き取り調査では，全世帯の69%が小農アブラヤシ栽培に従事していた。稲作に従事していた世帯が18％であることを鑑みると，アブラヤシ栽培は稲作をしのぐ重要な経済活動となっている［加藤；祖田 2012］。

栽培本数を徐々に増やす内陸先住民にとって，課題は労働力の調達である。栽培本数が数百本から1,000本以下の世帯であれば，ほぼ世帯内の労働力でまかなえる。栽培本数が1,000本以上になると，施肥や農薬散布，収穫などの際に，一時的に労働者を雇用することが必要となる。ところが，各世帯はアブラヤシ栽培に忙しく，村内で労働者を調達できないことも多く，インドネシア人労働者を雇うことが常態化してきた。栽培本数が2,000本以上になると，ほとんどの世帯でインドネシア人労働者を常時雇用していた［加藤；祖田 2012］。

先住民や華人エステートによる小中規模のアブラヤシ栽培の増加によって，ランプ（ramp）と呼ばれる果房買取り所でもインドネシア人労働者の需要が高まっている。ランプは，小農たちから果房を買い付け，工場に運ぶ仲買業者である。工場に行くまでの時間と輸送コスト，現金取得の利便性などを考慮し，ランプに実を売却する小農は多い。[7)]

ビントゥルの市街地からトゥバウに行くまでの道路沿いに，2011年には２ヶ所のランプが存在していたが，2014年にはその数は９ヶ所に増加しており，トゥバウ地域だけでも4ヶ所のランプが増設されていた。ランプの増加をみても，小農によるアブラヤシ栽培の拡大を実感することができる。そして，これら９ヶ所のランプのいずれにおいても，インドネシア人労働者が実労働にあたっていた。また，最近では小農にアブラヤシの苗を販売する育苗業者も現れ，こうしたところでもインドネシア人労働者に対する需要が拡大している。つまり，プランテーションや搾油工場だけではなく，小農や華人エステート，仲買業，育苗業などアブラヤシ産業全般においてインドネシア人労働者の増加が顕著になってきた。

本稿では，こうした場所で働くインドネシア人24人（男性21人，女性３人）に聞き取り調査を行った。[8)] 聞き取りの内容は，出身地，サラワクで働き始めた動機，現在までの職歴，仕事内容と賃金，故郷への帰郷頻度と送金，在地社会との関係などについてである。調査対象者のうち，17人が非合法就労者であったため，出入国の方法，就労エージェントの利用，パスポートの管理などについても聞き取りを行った。また，補足情報として雇用者である在地社会の小農に対しても，インドネシア人雇用に関するインタビューを行った。[9)]

Ⅲ　内陸社会におけるインドネシア人労働者の就労状況

本章では，インドネシア人労働者がどのようにサラワクの内陸先住民社会で働くようになったのか，その過程と形態について述べる。まず聞き取り調査の結果から出身地や民族集団，出入国の方法や経路などが多様化している近年の状況を示す。そして，彼らの就労履歴やプランテーションからの離脱経緯から，非合法就労者を生み出す背景について述べる。さらに，非合法就労者にとって内陸在地社会がどのような存在なのか，いくつかの具体的事例を紹介する。

Ⅲ-1　サラワクでの就労の契機と形態

本節では，インドネシアの故郷を離れてサラワクで働くようになった経緯，そして現在の就業先に至るまでの経歴について明らかにしていく。表１は，インタビューを行った24人のインドネシア人労働者の就労状況についてまとめたものである。24人の出身地はさまざまであった。最も多かったのがスラウェシ島出身で12人，次いでカリマンタン島６人，ジャワ島３人であった。そのほかにも，スンバワ島，ロンボク島，ティモール島など多様な地域から働きに来ていた。かつてサラワクで働くインドネシア人は，その多くが西カリマンタン州のサンバス出身者であった。現在はスラウェシをはじめとしてインドネシアの各地から働きに来ており，出身地の多様化がみられる。

サラワクでの就労動機としては，賃金の良さを挙げた人が多い。サラワクで働いた場合，インドネシアで働いた場合の約２倍の賃金が得られるという。サラワクに出稼ぎに行った知人が，帰郷後に家を新築したり，ビジネスを始めて成功したりしているのを見て，自分もサラワクで働きたくなったという人もいた（表中21番）。また，先にサラワクで働いていた親戚や知人の誘いでサラワクに来た人もいた。経験者から就労エージェントの情報や就業先の状況などを聞いた上でサラワクに来たという。マレー半島よりもサラワクの方が地理的に近接しており，言葉がインドネシア語に近いこともサラワクを選択する理由にある（表中４番）。また，サバでは仕事が見つけにくくなったためサラワクへ来た人もいた（表中14番）。サバのアブラヤシ産業はサラワクに先行しており，プランテーションの開発用地がすでに飽和状態に近づいている。そのことも，インドネシア人の就業先としてサラワクが選択される背景にあると思われる。

調査をした24人の仕事内容は，小農のもとで働く人が11人，ランプで働く人が５人，華人エステートが４人，プランテーションが１人であった。その他，以前は小農のもとで働いていたが，現在はサラワクの女性と結婚をして，妻世帯のアブラヤシ栽培をおこなっている人が１人いた。また，最近までプランテーションで働いていたが，現在はインドネシアから服の買い付けの仕事をしている人と，同じくプランテーションで働いていたが，現在はロングハウス建設の仕事をしている人が１人ずついた。以下ではそれぞれの場所での就労状況について述べたい。

小農のアブラヤシ畑で働く11人はいずれも，苗の植栽，除草，施肥，枝打ち，収穫など，ア

表１　インドネシア人労働者の就労状況

NO.	仮名	仕事場／形態	年齢	性別	出身地（州／県）	既婚/独身	月収（マレーシア・リンギット）	送金	パスポートの有無	労働ビザの有無	サラワクでの合計滞在年数	現職場での就労期間	備考
1	AM	ランプ	27	男性	南スラウェシ	独身	MYR 1,100	2ヶ月に1回	有り	有り	9年	3年	
2	MU	ランプ	48-49	男性	スンバワ	既婚	MYR 1,000以上	毎月 2百万ルピア	有り	有り	17年	5年	
3	PJ	ランプ	39	男性	ロンボク	既婚	MYR 1,200 ＋MYR 38/ton	毎月MYR 1,000以上	有り	有り	4年6ヶ月	4年	
4	IS	プランテーション小農	30	男性	南スラウェシ	既婚	MYR 1,100-1,200（MYR 5.77/hrs）	夫婦合計3千万ルピア/年4, 5回	有り（会社保管）	有り	5年	5年	No.5 (YU) の夫
5	YU	小農/行商	22	女性	南スラウェシ	既婚	ND	夫婦合計3千万ルピア/年4, 5回	有り	無し	5年	数ヶ月	No.4 (IS) の妻
6	IT	小農	27	男性	西カリマンタン	独身	MYR 800+ MYR 30/day (収穫)	無し	無し	無し	5年	2年	
7	NE	小農	38前後	男性	西カリマンタン	既婚	契約制 MYR 8,000 (ロングハウス建設)	無し	NA（マレーシアIC有）	NA	ND	5年	妻が同じ村でアブラヤシ栽培の仕事 (MYR 30/day)
8	BS	華人エステート	33	男性	スラウェシ	既婚	MYR 1,000-1,200	ほぼ毎月 約 MYR 700	有り（前会社保管）	無し	1年9ヶ月	9ヶ月	
9	ST	華人エステート	20代	男性	西ジャワ	独身	ND	ND	有り（雇用主管理）	有り	約3年	3年	
10	SF	華人エステート	20	男性	南スラウェシ	既婚	ND	ND	ND	ND	8ヶ月	8ヶ月	サラワク内のプランテーションに兄弟、親戚、知人が多数
11	JI	小農	30-31	男性	ティモール	独身	MYR 1,600-1,700	数ヶ月に1回 多い時MYR 3,000～4,000	有り	ND	11年	3年弱	婚約者がエージェントに騙される
12	NL	小農	20代半ば	男性	西カリマンタン	既婚	NA	不定期	無し	無し	5年	N.A.	
13	AN	小農	30代	男性	東スラウェシ	既婚	契約制で多いとき MYR 1,000	不定期	ND	無し	4年	4～5年	妻が夫の仕事を時々手伝う
14	RM	小農	40	男性	南スラウェシ	独身	MYR 600＋MYR 50/ton (収穫) ＋食事	不定期	無し	無し	7年	3年	
15	JV	華人エステート	30前後	男性	スラウェシ	既婚	ND	頻度不明 友人が送金	有り（前会社保管）	無し	2年	1年7ヶ月	
16	MH	小農	20代	男性	西カリマンタン	既婚	MYR 550＋MYR 30/ton (収穫) ＋食事	数ヶ月に1回 多い時MYR 2,000	有り	無し	4年3ヶ月	2年4ヶ月	
17	TA	小農	40代後半	男性	南スラウェシ	既婚	夫婦で MYR 2,000-3,000	数ヶ月に1回 約 MYR 3,000	無し	無し	34年	2年	No.18 (RI) の夫
18	RI	ロングハウス	40代	女性	南スラウェシ	既婚	夫婦で MYR 2,000-3,000	数ヶ月に1回 約 MYR 3,000	無し	無し	23年	2年	No.17 (TA) の妻
19	AI	小農	22	男性	南スラウェシ	既婚	未確定	無し	無し	無し	16年	1ヶ月未満	No.17 (TA) と No.18 (RI) の息子
20	EM	ランプ	27	男性	南スラウェシ	既婚	MYR 900-1,000	1年に4回程度	有り（期限切れ）	無し	5年以上	3ヶ月	送金額は夫婦で MYR 1,700-2,000/月
21	SH	小農	50前後	男性	ジャワ	既婚	MYR 1,000	不定期	有り	無し	ND	2年	No.22 (SW) の夫
22	SW	小農	40前後	女性	ジャワ	既婚	MYR 1,000	不定期	有り	無し	ND	2年	No.21 (SH) の妻
23	WD	小農	24	男性	西カリマンタン	既婚	MYR 500＋MYR 50/ton (収穫) ＋食事	毎月（金額不明）	有り (前雇用主保管)	無し	5年	2ヶ月	
24	JH	小農	20	男性	西カリマンタン	独身	MYR 600+ MYR 50/ton (収穫) ＋食事	無し	有り (前雇用主保管)	無し	8ヶ月	1週間	

出所：筆者のインタビューによる
ND = No date
NA = Not applicable
MYR = マレーシア・リンギット。2014年8月時点で、1リンギットは 32.45円。

ブラヤシ栽培の作業全般を行っていた。彼らは，特定の雇用主に雇われて月給制で働く場合もあれば（表中６，７，11，14，17，25，26番），複数の村人に雇われて日給制や歩合制で働く場合もある（表中13，18，19番）。また，アブラヤシの仕事に加えて車の修理や家の修繕など他の雑用仕事をしている人もいた（表中６，18番）。そして，特定の雇用主のもとで働いていても，

休日や仕事のない日には，他の村人の仕事を行う人がほとんどであった。10人中９人がこのような「副業」あるいは「兼業」を行っていた。

一方，プランテーションや華人エステート，ランプで働く場合は，果房の運搬担当や，ショベルカーの運転担当のように，ある程度の分業体制がみられた。彼らもこうした本業以外に，自分でアブラヤシを植えたり，休日に近隣の村人のアブラヤシ栽培や家屋建設の仕事をしたりして副収入を得ている（表中４，５，８番）。つまり，フォーマルに雇用されているインドネシア人も含めて，ほとんどの人がインフォーマルなアブラヤシ栽培に携わっていた。

彼らの月収は職種によっても異なるが，副収入も含めて1,000～1,700リンギット[10] であった。給与は完全歩合制の場合と，固定給に歩合制を組み合わせた場合がある。例えば，ランプで働くPJ氏（表中３番）の場合，固定給1,200リンギットに加え，果房の収集量１トン当たり38リンギットが加算されていた。華人エステートでは，仕事内容に応じた歩合制で支払われており，多い時で１ヶ月1,200リンギット，平均して1,000リンギット程度の収入になるとのことである。一方，プランテーションでは時給制で支払われており，例えばIW氏（表中４番）は，時給5.77リンギットで，超過勤務分も含めると月収1,100～1,200リンギットになるとのことである。

小農のもとで働く場合，特定の小農に雇われて働くと，固定給に加え果房収穫１トン当たり50リンギット前後が加算されていた。複数の小農のもとで働く場合には，日給30リンギット前後もしくは歩合制であった。人によっては，１日３食のまかないが付いていたり食費支給があったりする。例えば，JI氏（表中11番）の場合，固定給1,200リンギットに加え，収穫時には１トン当たり50リンギットが加算されるため，月収は1,600～1,700リンギットになる。雇用主の小農から得られる月給が少ない場合でも，雑多な副収入を合わせれば，ほとんどの人が1,000リンギット以上の月収を得ている。

聞き取りを行ったインドネシア人のなかには，働き始めたばかりで給与がどれぐらいもらえるか分からないと答えた人も複数いた。つまり，明確な契約関係を事前に構築せず，具体的な給与さえも分からないまま就労する場合も少なくない。しかし，そのこと自体に大きな不安は感じてないようである。このような不明確な雇用契約は，必ずしも非合法労働者側に不利に働くとは限らない。実際インドネシア人労働者が現地の小農たちに酷使されているという事例に出会うことはなかった。むしろ，何人かの労働者は，以前働いていたプランテーションは給与が良くないとか，支払いが遅れがちだったといった理由で辞め，現在の場所に移ってきた。つまり，インドネシア人労働者の多くは，頻繁な就労移動を繰り返すなかで，より好条件の就労先を選択しているといえる。

小農たちも，マレーシア人と同等の給与を支払わないとインドネシア人は働いてくれないことをよく理解している。インタビューを行った雇用主のなかには，給与，仕事内容，居心地などの面でインドネシア人は好条件のところに簡単に移動してしまうと嘆く人も多い。労働者を

探すのは容易だが長く定着させるのが難しいというのは，雇用主の間の共通認識となっている。そのため，賃金を高めに設定したり，食事や食費を提供したり，給与の前借りを認めたりするなど，さまざまな便宜を図ることで継続的な雇用を目指している。

インドネシアからサラワクに初めて来て働く際，就労エージェントを利用する人が多い。[11] 聞き取りをおこなった20人のうち17人がエージェントを利用した経験があると答えている。エージェントと事前に労働条件や給与などを交渉し，合意に至れば健康診断を受け，保険に入ってからサラワクへ来る。多くの場合は２年契約である。エージェントが交通費やパスポート発行代，ビザ取得費用等を立て替え，就労後に給与から初期費用が天引きされるシステムである。[12] エージェントを利用すると，プランテーションに配属されることが多いが，親戚や友人など個人的な伝手のある人は，エージェントを利用せずに個人でサラワクに来ることもある。このような場合，就労ビザを取得せずに，最初から非合法的に華人エステートや小農のもとで働くこともある。

エージェントを利用してサラワクやサバのプランテーションで働き始めた後，ほとんどの人は複数回の転職を経験している。現在の職についてからの平均就労期間は2.6年であった。これまでの合計滞在年数の平均が８年であったことを考えると，約３年に一度，仕事を変えていることになる。最初はプランテーションで数ヶ月から数年働き，その後別のプランテーションやエステートでの仕事を経て，現在の小農やランプの仕事にたどりつく人が多くみられた。聞き取りを行った24人中21人がプランテーションやエステートでの就労経験者であった。なかには，エージェントに紹介されたプランテーションでの仕事を１ヶ月足らずでやめ，エステートや小農の仕事に移っていった人もいた（表中８，10番）。またアブラヤシ部門での就労経験を持たず，建設業などを経て小農の仕事に就いた人もいた。これは小農におけるインドネシア人労働者の需要の高さを物語っている。

サラワクでの合計滞在年数は平均すると８年であったが，個々に見ると８ヶ月～34年と大きなばらつきがあった。頻繁に帰郷する人のなかには，西カリマンタン州出身のサンバス・マレーの男性（表中17番）のように，数ヶ月に１回の頻度で一時帰国する人もいた。出身地の近い人は頻繁に帰郷し，スラウェシやスンバワなど遠方出身者はより長くサラワクに滞在する傾向にある。聞き取りをした人の半数は，何度か一時帰国をした経験があった。こういった人達は，１年～数年に１回の頻度で，イスラームの断食明けの祝日や仕事の契約期間が終了したときに一時帰国をしていた。

一方，約半数の人は，これまで１度も故郷へ帰ったことがなかった。つまりサラワクで非合法滞在を長期間続けているのである。長い人だと，初めてサラワクに来てから20年間（表中14番）や16年間（表中20番）１度も帰国したことがなかった。なかには，夫婦でサラワクに来て子どもを２人産み，およそ２年に１回の頻度でスラウェシに帰郷しつつも，合計23年間サラワ

クで非合法就労を続ける女性もいた（表中19番）。

Ⅲ-2　非合法就労形態の多様性

調査対象者のうち，多くは非合法就労者であった。彼らは，プランテーションで合法的に働いた経験があるにもかかわらず，現在は小農や華人エステートのもとで非合法的に働いている。非合法就労者として働くことを選択した経緯や，現在の就業先にいることのメリットおよびリスクについてはどうなっているのだろうか。

サラワクで合法的に働くにはパスポートと就労ビザが必要である。自分でパスポートを所持しているのは，聞き取りをおこなった22人中７人のみであった。パスポートがあっても，有効期限が切れていたり，前の雇用主に預けたままにしていたりする人が多くみられた。就労ビザについても取得していると答えたのは22人のうち５人のみであった。就労ビザを持っていたのは，大企業のプランテーションや幹線道路沿いのランプで働く人である。なかには，プランテーション会社での就労を偽装したビザをエージェントから発行してもらい，実際には華人エステートで働いている人もいた。就労ビザを取得していない場合，インドネシア人がサラワクに滞在できるのは１ヶ月以内である。そのため，YU氏（表中５番）のように，毎月インドネシア国境までバスで行き，出国と再入国を繰り返す人もいた。また，長距離国際バスのドライバーに手数料を支払い，出入国の際の証印を違法に代行してもらう人もいた。

インドネシア人たちによると，有効パスポートがなくても，300リンギットを支払えば再発行でき，出国時に400リンギットを支払えば出国させてもらえるとの情報もある。なかには，出入国管理所を通らずに非正規のルートで帰国したことがあるという人もいた。再入国の際は，エージェントが新しいスポートを発行してくれるので心配はないという。このようにインフォーマルな出入国手段が多様に存在するため，非合法就労を続けながら一時帰国を繰り返すことが可能となる。

プランテーションでの仕事を辞めた理由には以下のような事情がある。第1に仕事そのものの厳しさである。第２に自由度のなさ，そして第３に就労ビザ取得の煩わしさである。SF氏（表中10番）によるとプランテーションでは，早朝に起きて決められた時間に持ち場まで歩いて行かなければならない。仕事が終わった後も宿舎まで歩いて帰らなければならず，それが辛くて辞めたという。また，決められた作業に追われ，病気のときでも休むことが難しい。こうした時間拘束性があるにもかかわらず，ランプや華人エステートで働く場合と比較して給与が少ないことも珍しくない。

小農のもとで働いた場合，働き方に融通を利かせることが可能である。雇用主との相談の上で，比較的自由に作業時間を設定したり，休暇を取ったりすることができる。実際，インドネシア人を雇用しているある小農は，労働者がどのような作業をしているのか把握していない日

が頻繁にあった。労働者をある程度信頼しており，毎日指示を出さなくても，ときどき一緒に作業をしたり，畑を確認したりするだけで問題はないとのことである。地元の小農のアブラヤシ畑で働くと，一定程度の自由裁量が認められることが，労働者にとって居心地の良さを与える。

また，小農の元で働いた場合，交渉次第で給与の前借りも可能になる。MH氏（表中16番）は，歯磨き粉やたばこ，携帯電話の通信料といった日用品を雇用主に立替え購入してもらい，月末にそれらが天引きされた給与を受け取っている。故郷への緊急の送金やその他物入りの場合に，数百リンギットの現金を借りることもある。こうした融通は，プランテーション労働では求めにくいものであり，非合法ではあっても小農のもとで働くことの魅力となっている。

このような非合法就労にインドネシア人を引き寄せる最大の魅力は，期限に縛られることなく働けることであろう。プランテーションで合法的に働く場合，契約期間満了後は必ず帰国しなければならない。それに対し，非合法就労の場合は上述の様々な方法によって長期就労や一時帰国も可能である。当然，ビザの取得手数料や更新費用も不要である。副業や兼業の自由度も高く，合法的に働く以上の収入を得ることも可能となる。こうした事情が，インドネシア人を非合法就労へと導いている。

それに加え，トゥバウという地域は非合法滞在のインドネシア人にとって，働きやすい地域でもある。というのも，この地域はアブラヤシ・プランテーションや華人エステート，地元の小農のアブラヤシ畑が隣接，混在しているからである。つまり，プランテーションでの就業から「逃避」したインドネシア人にとって，他のインフォーマルな労働需要が豊富に存在する。また，適度に内陸に位置していることも，インドネシア人に居心地の良さを与えている。都市部周辺や幹線道路沿いでは警察の検問が頻繁に行われているが，トゥバウは幹線道路から内陸に向かう支線沿いに位置する。この支線沿いや，そこからさらに村々に向かう未舗装道路などで検問が行われることはなく，非合法就労者が警察に捕まる心配はない。[13)]

一方，トゥバウよりもさらに内陸へ行くと，プランテーションや搾油工場の数は少なくなり，小農の数も少なくなるため，労働需要は小さくなる。つまり，トゥバウという地域は，非合法滞在のインドネシア人にとって就業先の選択肢が豊富に存在し，政府や警察の摘発からも逃れやすい地域だといえる。

さらに，アブラヤシの栽培面積を拡大しつつあるトゥバウ周辺の小農にとって，いまや非合法滞在のインドネシア人は不可欠な労働力となっている［Soda and Kato 2023］。インドネシア人自身も，アブラヤシ産業全体で慢性的な人手不足となっていることを認識している。そのため，職を探すのは困難ではないと述べる。実際，AM氏（表中1番）によると，近年小農の間でも外国人労働力の需要が高くなっているので，仕事は楽に見つけられるとのことである。知人のインドネシア人に紹介してもらったり（表中３番，11番，16番，17番，23番，24番），自身で内陸の村々を直接訪れたり（表中１番，２番，７番，14番，20番）して，比較的容易に

職を探せるという。また，サラワクに滞在するインドネシア人同士でSNSを通じて就労先の情報交換をすることも日常的に行っている。

なかには，最初から離職することを前提として，形式的にプランテーションで数日だけ働く人もいる。契約満了までプランテーションで働いていた人たちも，引き続きサラワクで就労したい場合には，周辺の華人エステートや先住民村落に流れ込むことになる。雇用者である地元の先住民にとっても，労働者がパスポートや就労ビザをもっているかどうかは大きな関心事ではない。逆にこのような非合法滞在のインドネシア人がいなかった場合，ランプや華人エステートの経営，小農栽培は成り立たない可能性が高い。つまり，現地の小農と非合法滞在のインドネシア人労働者は，相互依存的な関係にあるといえるだろう。

プランテーションからの労働者の離職と非合法化は，サラワク全体での恒常的な問題となっており，企業もインドネシア人労働者の流出を食い止めようと様々な手段を講じている。近年，労働者宿舎の快適性を向上させ，運動場や宗教施設，コミュニティーホール[14]を併設するプランテーションもあり，労働者の福祉にも配慮するようになってきた。しかし，このような便宜供与があったところで，必ずしも労働者の離職を食い止められるわけではない。

Ⅲ-3　在地社会とのつながり，故郷とのつながり

非合法就労者として長年サラワクで暮らすインドネシア人や，サラワクで家庭を持ったインドネシア人は，サラワクで滞在することにどのような居心地を感じているのであろうか。本節では，在地社会との関係や故郷との関係の概説を述べた後，比較的長期滞在をしている６人を事例に詳しく述べていく。

調査対象とした男性21人のうち既婚者は15人で，多くの人は妻子，もしくは子どもだけをインドネシアに残して単身または夫婦でサラワクに来ていた。既婚男性のうち４人はイバン，クダヤン（Kedayan），プナン（Penan）などのサラワクの女性と結婚していた。調査対象者の女性３人は全員，調査対象としたインドネシア人男性の妻で，彼女たちもサラワクで働いていた。

既婚か未婚かにかかわらず，ほとんどの人は収入の一部を故郷に送金している。聞き取りをおこなった20人中18人が送金を行っていると答えた。サラワクの女性と結婚し家庭を持っていても，４人中３人はインドネシアの家族に送金を続けていた。

送金頻度や金額は様々で，毎月送金している人もいれば，２ヶ月に１回，あるいはお金が貯まったら不定期に送金する人もいた。送金額は，多い人で毎月1,000リンギット以上を故郷に送る人（表中３番）がいた。

故郷に妻子を残していて，いずれインドネシアに帰る意志が強い人のなかには，故郷への定期的な送金を通して家を新築した人もいる（表中４，５番）。また，最低限の生活費を残して，ほとんどの給与を故郷に送っている人もいた。このように，インドネシア人労働者といえども

在地社会とのつながりや故郷とのつながり方には多様性がみられる。以下では，サラワクに長期滞在している６人の事例を紹介し，長期滞在をするようになったきっかけや，在地社会との関係，故郷との関係について述べていく。

［事例1　AN氏　東スラウェシ州出身30歳男性］

AN氏（表中13番）は2009年頃に同郷の知人たちと３人でエージェントを使わずにサラワクにやって来た。スラウェシでも仕事はあるが，サラワクの方が賃金がよいから来たという。プランテーションで短期間働いた後，2010年頃に現在の雇用主のカヤンの男性と知り合い，彼のアブラヤシ畑で働き始めた。現在，パスポートと就労ビザは所持していない。

AN氏はこの村で６～７世帯から収穫や除草，施肥などの仕事を依頼されて働いている。複数の村人から雇われている事例として特徴的である。この村ではアブラヤシ栽培を始めたばかりなので，栽培本数の少ない世帯が多い。そのため，一世帯で雇用するよりも複数の世帯で雇用した方が合理的だという。アブラヤシの仕事以外に，ゴムの植栽などを手伝うこともあり，給与はすべて歩合制でおおよそ月収1,000リンギットほどになる。

普段は，集落から３km離れたところにある，アブラヤシ畑の中の出作り小屋で暮らしている。サラワクのクダヤンの女性（30歳）と結婚しており，妻の連れ子と３人で暮らしている。在地の人々との関係については，妻の親族との付き合い以外には少なく，毎朝村人が小屋に来たり，電話をしたりして仕事の依頼が来るぐらいだ。これは，住居が村から離れていることにもよるだろう。しかしながら，この地域で同じように働くインドネシア人どうしでは互いに訪問しあうなどの交流がある。

１ヶ月に１週間ぐらいは仕事のない日があり，休みの日や断食明けの祝祭時には，妻の実家に帰ることもある。AN氏にはインドネシア人の前妻との間に小学生の女の子が２人おり，スラウェシで暮らしている。これまで４年間で２回スラウェシに帰り，子どものためにたまに送金を続けている。サラワクで新しい家庭を持った後もインドネシアに帰ったり，送金を続けたりしている。

［事例2　IT氏とNL氏　西カリマンタン州出身20代男性］

IT氏とNL氏（表中６，12番）は，2009年に就労エージェントを利用して一緒にサラワクへ来て，バードハウス[15] 建設の仕事に３年間従事した。その後，イバン村落の幼稚園建設の仕事に約半年間従事した。2012年に幼稚園の建設が終わり，手持ち無沙汰になっているところをこの村の男性に雇ってもらい，アブラヤシ栽培の仕事を２人で始めた。

２人がアブラヤシ栽培の仕事を始めて５ヶ月目に，NL氏は同村のイバンの女性と結婚して仕事を辞めた。NL氏は現在，妻の両親と同居して家族のアブラヤシ栽培を手伝っている。妻

との間には６か月の長男もいる。結婚するときには，雇用主だった男性が後見人となり饗宴の費用などを特別に負担した。この額はかなり大きく，雇用者と労働者という立場を超えた関係がみられる。

現在，IT氏のみがこの雇用主のもとで働いている。仕事内容は，苗の植栽，除草，施肥，収穫，運搬など，アブラヤシ栽培全般にかかわることで，それ以外にも，雇用主の部屋の修繕などを手伝うこともある。給与は，固定給800リンギットで，収穫時には１日30リンギットが加算される。他の村人の仕事を請け負うことはなく，休日は仕事の進み具合によって適宜とっている。

IT氏もNL氏もパスポートをエージェントに取られており，就労ビザも取得していない。しかし，警察に捕まる心配はまったくしていないようである。IT氏は雇用主の車に乗って，月に１回程度はビントゥルの町に遊びに行ったり食事をご馳走になったりする。IT氏は未婚で，故郷の家族に送金はしていない。最近6,000リンギットでオートバイを買ったばかりで，雇用主いわく，彼はインドネシアに帰る気はないとのことであった。普段は，ロングハウスのすぐ裏にある出作り小屋に住んでいるが，村の若者たちとロングハウスの廊下で夜遅くまで談笑し，一緒に寝ることもある。IT氏が村の若者と一緒に遊んでいるのは，住居がロングハウスのすぐ裏にあることにもよるだろう。

［事例3　RM氏　南スラウェシ州出身40代男性］

RM氏（表中14番）は，南スラウェシ州ボネ出身のブギス／マカッサルである。1980年代にエージェントを使って，同じ地域から約30人でサバにやって来た。サバではプランテーションを中心に約20年間就労した。その後，サバで仕事が見つけにくくなったため，サラワクへ来てビントゥル近郊のプランテーションで約4年間働いた。その間に伐採会社の仕事をしたこともあるという。そして，2011年に自分から仕事を探して雇用主のカヤンの男性のもとへやってきた。パスポートや就労ビザは持っておらず，これまで20年以上マレーシアに滞在したなかで，1度も故郷へ帰ったことはない。インタビューをした中で最長のマレーシア滞在期間であった。

RM氏は，普段は雇い主のアブラヤシ畑にある出作り小屋で暮らし，苗の植栽，除草，施肥，収穫，枝打ちなど，アブラヤシ栽培にかかわる作業全般を行っている。月給は固定給600リンギットに，収穫時１トン当たり50リンギットが加算される。また，食費は別に支給されている。月給制であるため，平日は他の村人のもとで働くことはないが，日曜日は休みなので，日雇いで他の人の収穫作業をすることもある。

RM氏は故郷の両親に今でも時々送金をしている。仕事の依頼を除いて，地元住民と交流をすることはほとんどない。しかし，この地域では，同じように小農に雇われて働くインドネシア人が大勢いるため，そうした人たちと行き来し談笑することは多い。筆者らが訪れた時も，友人のインドネシア人と談笑しており，冗談交じりにサラワクでアモイ（*amoi*若い女性）を探

したいと語った。

［事例4　MU氏　スンバワ島出身40代男性］

MU氏（表中2番）は幹線道路沿いにあるランプで果房の積み込み，計量，支払いの仕事をしている。とくに決まった休みはなく，月給は1,000リンギット程度だという。1988年頃にエージェントを利用してサラワクにやって来た。サラワクに来る前は，故郷のスンバワ島で稲や緑豆などを栽培して生計を立てていた。サラワクに来てからは，ビントゥル近郊のプランテーションを転々とし，2009年に現在の就労先に落ち着いた。彼自身もアブラヤシを400本ほど植えており，収穫した果房は自分が働くランプに持ってきて売る。パスポートは自分で管理しており，就労ビザも取得しているという。サラワクでの滞在は合計で17年になり，初めてサラワクに来てから５回故郷に帰ったことがある。

2001年には，サラワクのプナンの女性と結婚した。妻との間には４人の子どもがおり，全員マレーシア国籍で近隣の学校に通っている。普段は，雇い主の華人のアブラヤシ畑で家族とともに住んでいる。この５年間は故郷へ帰ったことはないものの，毎月約2,000,000ルピア[16]を両親に送金している。インドネシアに帰国する予定はないという。

［事例5　TA氏RI氏夫妻　南スラウェシ州出身50代男性40代女性］

TA氏（表中17番）は南スラウェシ州ソッペン県出身の50代の男性である。特定の雇用主に専従しているわけではないインドネシア人として，また家族で来て非合法就労をしている事例として特徴的である。TA氏は1982年にエージェントを使ってサラワクへ来て，最初はミリ近郊のプランテーションで働いた。初めて来たときは，マレーシアで働いた方が賃金がよいことを聞いており，また親戚がサラワクで働いていたこともあって，エージェントの勧誘を受け入れた。その後，ビントゥル近郊のプランテーション労働者や，トラック運転手として働き，2011年から現在の小農のアブラヤシ栽培の仕事を始めた。サラワクで働き始めてからすでに35年が経ち，その間に６回ほど帰郷した。1991年には，同じプランテーションで働いていた，同じ県出身の妻RI氏（表中18番）と知り合って結婚した。現在は，夫妻でアブラヤシ栽培の仕事をしている。

妻は1991年にエージェントに誘われて，従姉妹と一緒にサラワクへやって来た。初めて仕事をしたプランテーションで夫と知り合い，翌年ビントゥルの病院で長男（表中20番）を出産した。その後は，夫の仕事を手伝いながら家事育児をおこない，数年後に第２子である長女をミリの病院で出産した。子どもたちが学齢期になると故郷のスラウェシへ帰し，祖父母に面倒を見てもらったという。

夫婦でイバン村落の出作り小屋で暮らし，近隣の小農のアブラヤシ栽培の仕事をしている。

夫婦にアブラヤシの収穫を毎月依頼している小農が３人おり，それ以外にも，除草や施肥など，様々な仕事を頼まれて働いている。車の修理などの作業も請け負っており，その他の雑務も含めると，村周辺で10人前後のイバンから仕事を依頼されている。仕事はすべて日雇いで，賃金は歩合制あるいは日給制である。収穫の際の賃金は，１トン当たり50～75リンギットと雇用主によって異なり，夫婦２人で月に2,000～3,000リンギット程度の収入になる。月に1～2週間は休みの日があるため，プランテーションでの仕事と比べて楽で，かつ収入も多い。

夫妻は，パスポートや就労ビザを所持していないが，帰国するときに罰金を支払えば帰れるので，とくに不安はないという。実際妻は，２年に１度の頻度でスラウェシに帰っている。現在は，故郷に家を建設中で，その資金として数ヶ月に１回3,000リンギットを長女に送金している。長女はスラウェシで成人し，結婚して２人の子どもがいる。

長男（表中19番）はスラウェシの小学校を卒業した後，マレーシアの中高等学校に通うために，12歳のときにサラワクに呼び寄せた。母親によると，サラワクでの出生証明書があるので，マレーシアの公教育を受けることが可能だ。結局長男は中学校へは行かず，そのままサラワクで働くことになった。長男はその後，木材会社，製材所，トラックの運転，電気配線，重機修理，工場建設，道路工事など１ヶ月から数ヶ月で職場を変えて働いてきた。現在は，ランプでアブラヤシの果房積み込みの仕事をしている。2014年には，地元のイバンの女性と結婚し，普段は妻のロングハウスで暮らしつつ，ときどき両親の出作り小屋を訪れている。長男はサラワクに来てからの16年間，まだ一度も帰国したことはない。パスポートや就労ビザは持っていないが，マレーシアの出生証明書があるので，将来マレーシア国籍取得を希望している。

TA氏夫妻は，仕事がない時は長男が働くランプに併設された売店に来て，そこで働くインドネシア人労働者らと談笑して過ごすことが多い。長男も職場に妻を連れて来て過ごすことが多く，時には村人と一緒に闘鶏をして楽しんでいる。

［事例6　YU氏一家　南スラウェシ州出身22歳女性］

YU氏は（表中５番）は，３人姉妹とその夫たちと一緒にプランテーションの宿舎で暮らしている。夫のIS氏（表中４番）は同じ南スラウェシ州ブルクンバ県出身の30歳の男性である。プランテーションでショベルカーの運転手として働いている。２人はサラワクに来る前にスラウェシで結婚をし，６歳の長男がいる。長男はスラウェシで祖父母と暮らしており，小学校に通っている。故郷では，稲や丁子，コーヒーを栽培して生計を立てていた。

夫婦で初めてサラワクに来たのは2009年で，エージェントを利用してプランテーション会社で働き始めた。サラワクを選んだ理由は，マレー半島よりも言葉が近く，距離的にも故郷に近いからとのことだ。現在働いているプランテーションでは，最初の契約は２年間で，その後1年単位で更新していき，合計10年まで更新が可能だという。夫の賃金は時給5.77リンギットで，

超過勤務も含めると月収1,100～1,200リンギットになる。それ以外にも，休日を利用して，近隣の小農の日雇い仕事を夫婦で行っている。

YU氏は，2013年まで夫と同じプランテーションで，シロアリの被害を確認する仕事をしていたが，疲れるので契約を更新せずに辞めた。退職後は就労ビザが使えないため，毎月インドネシア国境までバスで行き，パスポートに出入国の押印をしてもらっている。その際，インドネシア側で安価な衣料品を仕入れ，サラワクのプランテーションの宿舎で約1.5倍の値段で販売している。

YU氏夫妻は年に５回故郷に送金をしており，最近サラワクでの貯蓄により故郷に家を新築した。インドネシアでは，短期間でこれだけの金額を稼ぐことは難しいので，将来的にはサラワクでの就労でさらに蓄財し，いずれは故郷で自動車やオートバイの修理店を開きたいと考えている。

YU氏の２人の姉とその夫たちも同じプランテーション会社で働いている。長姉は現場監督の仕事で，その夫は果房収穫の仕事をしている。この２人も，これまでの貯蓄で翌年５月に故郷に家を新築する予定だと話していた。次姉は，サラワクに来る前に，サバのカカオ農園で働いていた。その時に知り合ったインドネシア人の男性と結婚し，一緒にサラワクに来て現在のプランテーションで働き始めた。2007年に，プランテーションで働いているときに子どもを出産した。その子どもは現在スラウェシにいる。サラワクでの出生証明書があるため，いずれマレーシア国籍を取得できるという。次姉の夫も同じプランテーション会社で果房収穫の仕事をしている。プランテーション会社での仕事を辞めたYU氏を除いて，全員が就労ビザを取得しており，パスポートを会社に預けている。

YU氏３姉妹とその夫たちは，プランテーションで働きつつも，近隣のロングハウス住民と良好な関係を築いている。とくにアブラヤシ栽培を行っているRG氏とは懇意にしており，時々RG氏のアブラヤシ収穫の日雇い仕事を行っている。RG氏がプランテーションの労働者宿舎を訪れた際には，インドネシアの故郷から取り寄せた菓子をふるまったり，RG氏のロングハウスを訪れる際に手作りのケーキを焼いて持参したりしている。同様に，RG氏も彼らに鶏肉を買って届けたり小遣いを渡したり，村で採れた果実を分けたりしている。このように，プランテーションで働く合法労働者たちも，近隣のロングハウス住民と交流を持ち，休日にインフォーマルな収入を得ている人もいる。

Ⅳ　考察

Ⅳ-1　新たな就労先としての在地社会――インドネシア人労働者の可視化

2000年代以降のアブラヤシ・プランテーションの拡大に伴って，サラワクにおけるインドネシア人労働者の数は，合法／非合法に関わらず，急速に増加した。それに加えて，近年の小農

アブラヤシ栽培の増加によって，内陸の在地社会においてもインドネシア人労働力の需要は高まっている。

マレーシアにおける非合法就労は，その経緯から見て大きく３つのタイプに分けることができる。つまり，最初から非合法に入国するタイプ，入国当初持っていたパスポートや就労ビザの期限を過ぎてオーバーステイしているタイプ，そして当初の正規就労先から「逃避」して別の就業場所へと移動するタイプである［Castles and Miller 2009; Pye et al. 2012］。

本稿の事例の場合，ほとんどのインフォーマントがアブラヤシ・プランテーションでの就労経験を持っており，初期の段階では上記の第２，第３のタイプが多数を占めていたと思われる。彼らの多くはその後何度か帰郷しており，第１のタイプで再入国しているというパターンもある。

第３のタイプに関して言えば，SOPPOA事務局のMG氏によると，アブラヤシ・プランテーションからのインドネシア人労働者の逃避率は，企業の労務管理体制によっても異なるが，年間５～10％くらいだろうとのことだ。2018年の時点で，サラワクにおけるアブラヤシ・プランテーションの面積は約110万ヘクタールであり，１ヘクタールあたり0.33人が雇用されているとすれば［Barlow 2003］，約36.3万人のプランテーション労働者が存在することになる。そして，MG氏の言が事実だとすれば年間1.6～3.3万人[17] 程度のインドネシア人がフォーマルなプランテーション・セクターから「逃避」していることになる。

そうした者のうち，どのくらいが本国に帰郷して，どのくらいがサラワクに留まっているのか，残念ながらその推計値すら得ることができない。しかし，サラワクに留まるインドネシア人にとって，アブラヤシ小農や華人エステート，そして小農の増加に伴って存在感を増してきたランプ，さらには育苗業者などが，彼らを吸収する就業場所として重要な意味を持ち始めていることは，確かであろう。

一方，サラワクの内陸先住民にとって，これまでプランテーション内で生活を完結させてきたインドネシア人は，ほぼ不可視の存在であった。そうしたインドネシア人がプランテーションから流出して在地社会で働くことにより，在地社会において彼らは「可視的」な存在になってきた。

かつてサラワクで働くインドネシア人の多くは，陸続きでバス移動が容易な西カリマンタン出身のサンバス・マレーが中心であった。いまや小農社会に入り込むインドネシア人の出身地や民族集団は多様化しており，「脱サンバス化」が進行しているといえる。McCarthy and Cramb［2009］が指摘したように，マレーシア半島部と比較した時，サバとサラワクには，インドネシア東部の経済的により貧困な地域からの労働者の流入がみられるようになっている。サバは地理的な近接性から，以前よりインドネシア東部からの移動がみられたが，サラワクのアブラヤシ・セクターにおいては，それが「脱サンバス化」という形で近年顕著になりつつあ

るといえる。また，そうした出身地の多様化に伴い，彼らの出入国の経路と方法も多様化している。空路，陸路，海路およびそれらの組み合わせを利用した出入国は，合法のものもあれば，非合法のものもあり，往路と復路で異なる経路を利用する労働者も多い。

アブラヤシ小農たちも，インドネシア人の出身地の多様化を強く意識しており，ある雇用主は偏見交じりの冗談として,「サンバス･マレーはすぐに逃げる。ブギスは怠惰で人を騙す。ティモールは他民族との交流が難しい上に，よく人妻を寝取る。ロンボクはまじめで，ジャワもまずまず」などと語る。とくに「サンバス・マレーはすぐに故郷に帰ってしまう」というのは，多くの雇用主が共通して語っている。このように，偏見や誤解が入り混じりながらも，インドネシア人労働者を一枚岩的に捉えるのではなく，その出身地，民族集団の多様性についての認識は，小農雇用主の間で広まりつつある。これは，インドネシア人労働者がサラワクの在地社会において可視的存在になってきたことの表れであろう。

Ⅳ-2　非合法就労のリスクとメリット

これまで明らかにしてきたようにインドネシア人にとって，小農のアブラヤシ畑で働くことには一定のリスクやデメリットがある。その最大のものがパスポートおよび就労ビザの問題である。

プランテーションで働く場合，パスポートは会社が預かることが多い。つまり，外国人労働者は会社に縛られ「身動きが取れない（trapped by the company）」状態になる［Idrus 2008］。就労先を変えたい場合は，パスポートの返却を諦めてフォーマル・セクターから離脱するしかない。とくに，移民規則の強化によって様々な規制や拘束が実質化されるなかで，インドネシア人労働者にとっては，状況改善のためのひとつの選択肢として，ラリ（*lari* 逃避，離脱）という戦略の重要性が高くなった［Pye et al. 2012］。

筆者らが話を聞いたインフォーマントも，パスポートはプランテーションに置いたまま辞めてきたという人が多い。また，パスポートを所持している場合でも，小農アブラヤシ畑やその周辺で働く場合は，就労ビザの申請や延長は困難であるため，多くの場合は非合法就労になる。パスポートおよび就労ビザを持っていないことで，警察に捕まるリスクが発生するのも事実である。とくに，都市部周辺での検問を恐れるインドネシア人労働者のなかには，めったに町に行かずに，銀行を通じての故郷への送金も雇用主や知人に現金を預けて送金代行を依頼する者もいる。

パスポートや就労ビザを持っていないと，けがや病気をした場合にも適切な医療サービスを受けられる保障がないという懸念もある。あるいは，非合法滞在であるがゆえに，雇用主や斡旋業者から不当な扱いを受けたとしても（たとえば賃金の不払いや過剰な労働の強要など），どこかに訴える手段を持たないことも，インドネシア人にとっては不安材料の一つになりうる。

逆に言えば，給与への不満は，雇用主と粘り強い交渉を行うよりも，別の就労場所を探す十分な動機となりうる。このことが非合法就労のインドネシア人の頻繁な就労移動を促す要因であると考えられる。

しかし，多くのインドネシア人にとって，内陸の小農アブラヤシ生産の現場には，これらのリスクやデメリットを上回るメリットが存在している。これまで明らかにしてきたように，まず時間的なフレキシビリティである。プランテーションでの労働は時間的拘束性が強く，体力的に厳しいが，小農アブラヤシ畑での労働は，作業内容の選択や休暇の取得などの融通を利かせやすい。自由度の高さが非合法就労を選択する重要な理由となっていることは，これまでの研究でも指摘されていることである［Pye et al. 2012; Shawaluddin et al. 2011］。小農アブラヤシ畑で働く場合には，雇用主のもとで働く以外に，暇なときは他の小農の畑で働いたり，村の仕事や個人の雑用を引き受けたりして，副業的に日当を稼ぐこともできる。空いた時間を有効活用して収入を増やす機会が豊富に得られることも，メリットとして挙げられる。[18] このように，雇用主との相談や一定程度の自己裁量に基づいて，作業日程や作業量を決めることができる。それだけはでなく，多様な「副業」の組み合わせ次第で，プランテーションでの給与と比較して遜色のない，あるいはそれ以上の収入を得ることもできる。給与の前借りや日用品の立替え購入，送金の代行といった便宜を図ってくれる雇用主も少なくない。集団居住や集団労働のストレスもない。雇用主の車に乗って休日町に遊びに行く人もおり，より自由で人間的な生活が可能となっている。

また，女性労働者の場合，プランテーションでは子育てをすることができず，妊娠すれば帰郷を余儀なくされることが多いが，小農のもとで働く場合は，妊娠，出産，育児，あるいは子どもの呼び寄せなども不可能ではない。出生登録の際に，子どもの父親として村人の名前を借りたり，村長や大首長のサインをもらったりすることで，子どもの出生証明を取得できることもある。出生証明があれば，子どもはいずれマレーシアの国籍を取得することも可能になる。こうした在地社会の協力を得ることによっても，サラワクでの非合法滞在のリスクは大幅に軽減できる。

このように，プランテーションからの逃避，つまりフォーマル・セクターからの離脱は一定のリスクや不安を抱えることになるものの，サラワクの内陸在地社会では，雇用主との間に融通の利く関係を構築できれば，ある程度の自由度を確保した上で自己裁量に基づく活動ができる。そして，プランテーション労働と同等かそれ以上の収入を得ることもできる。また，長期滞在や家族の呼び寄せも容易であることなどから，在地社会はインドネシア人労働者にとって「居心地の良い」場所となりうる。[19]

Ⅳ-3　インドネシア人労働者のネットワーク

プランテーションから逃避したインドネシア人たちのサラワクでの就労と，故郷や在地社会との関係性は，個人によって大きく異なる。サラワクで結婚し，故郷に帰るつもりがないと言う人でも，家族に送金を続けていることもある。また，プランテーションから離脱して在地社会に入り込んだ人でも，プランテーションで働く同郷者たちとのネットワークを維持しながら，断食明けの祝祭など，祝日にはプランテーションの労働者宿舎で寝泊まりする事例もみられた。

いずれにせよ，インドネシア人労働者に共通してみられるのは，各方面とのネットワークの構築や拡大を積極的に行っている点である。彼らは携帯電話やスマートフォンを利用したメール通信やSNS等を通じて，故郷の親族と頻繁に連絡をとっており，以前の職場で知り合った仕事仲間や，他のプランテーション等で働く同郷者たちとも情報交換を繰り返している。[20)]

SOPPOA事務局のMG氏によると，インドネシア人労働者同士のネットワークが強化され，より条件の良い就労先などの情報交換が頻繁に行われるようになっており，そのことがプランテーションからの労働者の逃避を一層促すことになっているという。彼らの職場放棄は，プランテーション経営者のみならず，小農の雇用主も警戒している点であり，その意味で逃避という常套手段は雇用主との交渉力を高めるための潜在的ツールになっているといえる。

その一方で，インドネシア人労働者たちのネットワークが小農の雇用主たちにとって有利に働く側面もある。つまり，新たな労働需要が発生した時に，エージェントによる紹介に頼るとコストがかかり，どのような人物が派遣されるか分からずリスクが大きいため，在地社会で働くインドネシア人の個人的ネットワークを通じて，労働者の親戚や知人をインドネシアから直接呼び寄せる傾向が顕著になっている［Soda and Kato 2023］。

また，在地社会に入り込んだインドネシア人が，以前の就業先の労働者と関係を維持していることも多く，彼らが仲介することで小農とプランテーション労働者との間を結び付けることもある。とくに，収穫作業などのように多くの人手を要する場合に，村人を一時雇用するだけでなく，プランテーションの宿舎から労働者を「借りてくる」という実践もなされている。プランテーション労働者にとっても，休日を利用して小農のアブラヤシ畑で日雇い労働をすることは，副収入を得られるメリットがある。

このように，インドネシア人同士のつながりと情報収集力は，より条件の良い場所を探すことを容易にするという意味で，雇用主との賃金交渉に有利な材料を持つこともあれば，その一方で，新たな労働力を紹介することで雇用主のアブラヤシ経営をサポートするという側面も持っている。つまり，雇用主にとっては，インドネシア人は単なる労働力というだけの存在ではなくなっている。労働者自身の持つネットワークは，売り手市場を強化しうる脅威であると同時に，持続的な小農アブラヤシ栽培を行っていく上で活用できる重要な資源にもなっているのである。これらのことから，地元の小農と非合法滞在のインドネシア人の間で，信頼に値す

る個人的関係をどのように構築するのかは，双方にとって重要な意味を持っているといえる。

Pye［2013］や Pye et al.［2012］は，インドネシア人のネットワークが移民規則などの制度や枠組みを形骸化させる可能性について指摘している。本稿で見た，インドネシア人労働者の在地社会での増加は，小農アブラヤシ経営者を，故郷の村々やプランテーション労働者と結びつけることで，インドネシア人の動き方を一層多様化，複雑化することに寄与しており，インドネシア人雇用のフォーマル性とインフォーマル性の境界をあいまいにする要素があるといえるだろう。

V　結論

マレーシアは1980年代以降，何度かの大きな社会経済的変動を経験しつつも，これまで外国人労働者を継続的に受け入れてきた。そして，本稿の舞台となったサラワクにおいては，2000年代以降のインドネシア人労働者の増加が注目に値する伸び率を示している。

外国人の増加に対する懸念はこれまでもしばしば指摘されてきた。たとえば，外国人労働者がマレーシア人の労働市場を侵食する危機感を煽ったり，犯罪や疫病の温床とみなしたりすることで，「モラル・パニック」への恐怖が喚起されることもある［Cooke and Dayang Suria 2013; Pye et al. 2012, ］。実際，Pillai［1998］は，1997年の金融危機の直後，一時的に登録外国人労働者数が減少したが，送出国側のプッシュ要因が小さくなったわけではなく，非合法の労働者が増える結果になったことを指摘している。とくに建設セクターでの労働需要の激減なども影響して，マレーシア人の失業率上昇につながったとしている。

また，Castles［2004］は，2002年の移民規則の厳格化は，外国人労働者の増加が既存のマレーシア社会に影響を与えかねないことを懸念した結果であったと指摘している。世界市場に常に左右されるアブラヤシ産業においては，景気の不確実性に対応するための雇用調整弁としてインドネシア人労働力を利用しつつ［Saravanamuttu 2013］，なおかつ，マレーシアの在地社会との関わりを極力制限しようとする政治的意図が，ここに現れているといえる。

しかし本稿で見たように，サラワクにおいては，インドネシア人労働者の在地社会への浸透という現象がみられるようになってきた。それは，在地社会の側から見れば，小農アブラヤシ栽培の拡大によって，農村部における新たな労働需要が創出された結果であるといえるが，外国人労働者の立場から見れば，Pye et al.［2012］が指摘しているように，法制度の厳格化がむしろ彼らのインフォーマル・セクターへの移動を促しているという側面もある。サラワクにおけるインドネシア人労働者の位置付けは，こうした雇用のフォーマル化とインフォーマル化の間の往復運動の過程にあるといえる。

プランテーションにおける労働力管理のフォーマル化が進行する一方で，そこから離脱するインドネシア人も年々増加している。そうしたインドネシア人にとって，内陸の在地社会は「逃

げ場」の選択肢のひとつとして重要性を増している。

サラワクの内陸在地社会にインドネシア人が徐々に浸透していくなかで，小農アブラヤシ栽培をめぐる雇用主と労働者との関係は，いろいろな意味で多様化，複雑化しつつある。その過程において，雇用主とインドネシア人労働者の間で，協力関係や対立，葛藤を含む，より実質的で人間的な交渉が展開されるようになってきた。

インドネシア人労働者にとっては，何らかの不満や期待をもって，フォーマル化されつつあるプランテーション労働の現場から離脱した時，内陸でアブラヤシ栽培を拡大させている在地社会は，プランテーションとは異なる就業機会を提供してくれる，新たな生存の場になっている。そして，小農栽培が拡大している内陸では，華人投資家が経営する中規模エステートや，小農が果房を運び込むランプなどの関連産業も増加している。それらの場所におけるインドネシア人労働力の需要は一層拡大しつつある。

インドネシア人労働者は，雇用主との個人的関係に加え，村人との婚姻やサラワクでの出産，故郷からの家族の呼び寄せ等を通じて，在地社会との関係は確実に緊密化している。さらに，自らアブラヤシ栽培を行う者も若干ながら存在するなど，サラワクでの生存基盤を確立しつつあるインドネシア人も現れている。

本稿で見たような内陸における小農アブラヤシのフロンティア・ゾーンは，フォーマル化が進んだ低地のプランテーション空間でもなく，国境バッファー・ゾーンという最奥地の完全不可視の世界でもなく，それらの中間に位置するものである。それは，政府当局からは「不可視」のインフォーマルな就労の場であり，また，プランテーション労働では実現しえなかった在地社会との関係を構築できる新たな生存の場でもある。そこは，フォーマルとインフォーマルの中間的な場でもあるといえる。つまり，内陸部に広がりつつあるアブラヤシ小農の世界は，地理的にも社会的にも制度的にも，インドネシア人労働者にとって「居心地の良い」曖昧なニッチ空間として重要な意味を持つようになっている。

そして，これらのインドネシア人を基点としたネットワークの拡大は，サラワクの在地小農と送り出し側のインドネシアの村々とを結び付けるだけでなく，小農とプランテーション労働者を接近させる方向にも働いている。サラワクの内陸在地社会というニッチ空間から広がるネットワークは，インドネシア人労働者の生存戦略を支えているだけでなく，サラワクの在地社会を多様な外部社会と結び付ける機能と可能性をも有しているのである。

謝辞

本研究は，科学研究費補助金（課題番号：15K21109，16K03200，19K20548）の一部を使用しました。現地調査に際し，協力を頂いた方々に感謝を申し上げます。

注

1）Department of Statistics Malaysia 1992; Department of Statistics Malaysia 2001; Department of Statistics Malaysia 2011。

2）サラワク・アブラヤシ・プランテーション所有者協会（SOPPOA）事務局の MG 氏によると，2014 年まではサラワクのアブラヤシ・プランテーションにおいては，インドネシア人以外の外国人労働力の導入が認められていなかったが，将来的な労働力不足を懸念して，2015 年 4 月から試験的にバングラデシュ人労働者の導入に踏み切ったという。

3）国境バッファー・ゾーンとは，インドネシアとの国境付近でプランテーション開発が禁止されている地域を指す。

4）とくに，陸続きのカリマンタン各州からの山越えによる不法入国が増加していると報道されている。こうした税関を通らないインフォーマルな越境ルートは古くから存在しており，「ネズミの道 *jalan tikus*」と呼ばれてきたが，いまや「ゾウの道 *jalan gajah*」になっていると揶揄される［Borneo Post 2015 年 3 月 13 日］。

5）本稿でいう「インフォーマル」というのは，公的な資料や統計には反映されない非公式あるいは非正規の経済活動を示す。アブラヤシ関係の労働に関して言えば，フォーマルな労働者とは，パスポートや就労ビザを取得した上でアブラヤシ農園や搾油工場，ランプ等で就労する者を指す。インフォーマルな就労とは，そうした公的書類を持たない状況下での就労全般を指す。パスポートやビザを持たない「非合法」就労はもちろんのこと，それらを取得していながらも，前（元）雇用主に預けたまま，あるいは取り上げられたまま，別の就業先に移る場合も「インフォーマル化」として捉えている。

6）小農の場合は，アブラヤシ栽培だけでなく，農外就業も含め多様な生業活動を行う場合が多く，農業活動に割く時間が限られることも多い。そのことが，アブラヤシ栽培に従事する外国人労働力の需要を高める結果になるという指摘もある［Cramb and Curry 2012］。

7）収穫した果房を搾油工場に直接売る方が買取り価格は良いが，工場の数は限られている。また，工場に果房を売る際には銀行口座が必要とされ，振込にまでに 2 週間程度のタイムラグが生じる。工場によっては一定量以上の果房生産をしていないと買い取ってくれないところもある。一方ランプでは現金払いであり，少量の果房でも買い取ってもらえる。

8）インタビューを行った 24 人は，プランテーション労働者，ランプ労働者，華人エステート，小農労働者など仕事内容のばらつきやジェンダーバランスを考慮して選択した。

9）本稿で使用する情報は，主に 2014 年 3 月と 9 月に行った現地調査に基づくものであり，その後も継続的におこなった補足調査の情報が含まれる。新型コロナウイルスの影響により状況が変化した部分については，別稿で報告したい。

10）1 リンギットは 32.45 円（2014 年 8 月）。

11）サラワクに入国するルートは，主に以下の 2 つがある。1 つは，西カリマンタンのポンティアナック経由で，バスでサラワクへ入るというものである（図 1）。2 つ目は，北カリマンタンのヌヌカン経由である。スラウェシのマカッサルから，ヌヌカンに船で渡り，そこからスピードボートでサバのタワウへ行き，バスでサラワクに入る。

12）しかし，なかには，婚約者をサラワクに呼び寄せようとして，エージェントに 600 リンギットを支払ったが，持ち逃げされるという被害にあった人もいる（表中 11 番）。

13）サラワクの幹線道路はクチンとミリをつなぐ沿岸部のみであり，非合法就労者の摘発を目的とした検問は，こうした幹線道路と，インドネシア国境に通じるごく一部の主要道路で，不定期に行われるだけである。それ以外の内陸地域では，検問等で摘発される心配はまずない。サラワクの内陸先住民が多数居住する地域では，非合法インドネシア人も捕まる心配はないと考えている。

14）イベントをおこなったり，屋内スポーツができる施設である。
15）食用となるツバメの巣を生産するために，アナツバメを呼び寄せて営巣させるための半養殖施設である。近年，内陸部においてもバードハウスが盛んに建設されるようになっている。
16）1ルピアは0.0088円（2014年8月）。
17）サラワクではアブラヤシ・プランテーションの労働者のうち90%を外国人（ほとんどがインドネシア人）が占める［Cramb and Ferraro 2010］。
18）この点については，雇用主の側から見ても，世帯間でインドネシア人労働者の「貸し借り」をしたり，複数世帯で1人のインドネシア人を雇用したりすることで，より効率的にインドネシア人労働者を使用できるというメリットがある。
19）プランテーションから逃避し，非合法就労を選択する別の大きな理由として，一般に，就労ビザの取得にかかる費用と手間を節約する（あるいは支払えない）というものもあるという［Wong and Anwar 2003］。
20）また，就労先の選択に際して，携帯電話の電波の有無は重要で，電波の入らない奥地のプランテーションは避けられる傾向にあるという。その意味で，比較的電波状況の良い道路沿いのアブラヤシ小農の村々は，彼らにとって都合の良い就労先になるといえるだろう。

参照文献

日本語文献

新井祥穂．2021.「アブラヤシ農園企業における農園労働者の存在形態－リアウ州PTPN　Vの事例分析」林田秀樹編著『アブラヤシ農園問題の研究－農園開発と地域社会の構造変化を追う』pp. 92–105. 京都：晃洋書房.

加藤裕美；祖田亮次．2012.「マレーシア・サラワク州における小農アブラヤシ栽培の動向」『地理学論集』87(2)：26–34.

外国語文献

Abubakar, S. Y. 2012. *Migrant Labour in Malaysia: Impact and Implications of the Asian Financial Crisis*. EADN Regional Project on the Social Impact of the Asian Financial Crisis. Makati: East Asian Development Network.

Barlow, C.; Zen, Z.; and Gondowarsito, R. 2003. The Indonesian Oil Palm Industry. *Economic Journal* 3(1): 8–15.

Castles, S. 2004. The Myth of the Controllability of Difference: Labour Migration, Transnational Communities and State Strategies in the Asia-Pacific Region. In *Perspectives on Transnationalism in the Asia-Pacific*, edited by Yeoh, B. S. A.; and Willis, K., pp. 16–36. London: Routledge.

Castles, S.; and Miller, M. J. 2009. *The Age of Migration*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.

Cooke, F. M.; and Dayang Suria, M. 2012. Migration and Moral Panic: The Case of Oil Palm in Sabah, East Malaysia. In *The Palm Oil Controversy in Southeast Asia: A Transnational Perspective*, edited by Pay, O.; and Bhattacharya, J., pp. 140–163. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.

Cramb, R.; and Curry, G. N. 2012. Oil Palm and Rural Livelihoods in the Asia–Pacific Region: An Overview. *Asia Pacific Viewpoint* 53(3): 223–239.

Cramb, R.; and Ferraro, D. 2010. Custom and Capital: A Financial Appraisal of Alternative Arrangements for Large-scale Oil Palm Development on Customary Land in Sarawak, Malaysia. Paper contributed to a Workshop on "The Oil Palm Dilemma: Agrarian Transformation, State Policy and Resource Conflict

in Indonesia and Malaysia." Australia National University, 8-9 April 2010.

Department of Statistics Malaysia. 2001. *Population and Housing Census of Malaysia 2000*. Kuala Lumpur: Department of Statistics Malaysia.

Department of Statistics Malaysia. 2011. *Population and Housing Census of Malaysia 2010*. Kuala Lumpur: Department of Statistics Malaysia.

Department of Statistics Malaysia Sarawak. 2015. *Yearbook of Statistics, Sarawak 2014*. Kuching: Department of Statistics Malaysia Sarawak.

Department of Statistics Malaysia Sarawak. 2022. *Sarawak Statistics Yearbook 2021*. Kuching: Department of Statistics Malaysia Sarawak.

Ford, M. 2006. After Nunukan: The Regulation of Indonesian Migration to Malaysia. In *Mobility, Labour Migration and Border Controls in Asia*, edited by Kaur, A.; and Metcalfe, I., pp. 228–247. Basingstoke: Palgrave Macmillan.

Idrus, N. I. 2008. 'Makkunrai passimokolo'. Bugis Migrant Women Workers in Malaysia, In *Women and Work in Indonesia*, edited by Ford, M.; and Parker, L., pp. 155–194. Oxon: Routledge.

Ishikawa, N. 2012. 'State-making and Transnationalism: Transborder Flows in a Borderland of Western Borneo. In *Transborder Governance of Forests, Rivers and Seas*, edited by De Jong, W.; Snelder, D.; and Ishikawa, N. pp. 31–50. London: Earthscan.

Kassim, A. 2005. Cross-border Movement of Foreign Workers in Malaysia: A Comparative Analysis. *Master Builders Journal* 3rd Quarter 2005: 78–91.

Kato, Y.; and Soda, R. 2020. The Impact of RSPO Certification on Oil Palm Smallholdings in Sarawak. In *Anthropogenic Tropical Forests: Human–Nature Interfaces on the Plantation Frontier*, edited by Ishikawa, N.; and Soda, R., pp. 337–356. Singapore: Springer.

McCarthy, J. F.; and Cramb, R. A. 2009. Policy Narratives, Landholder Engagement, and Oil Palm Expansion on the Malaysian and Indonesian Frontiers. *Geographical Journal* 175(2): 112–123.

Pillai, P. 1998. The Impact of the Economic Crisis on Migrant Labor in Malaysia: Policy Implications. *Asian and Pacific Migration Journal* 7(2–3): 255–280.

Pillai, P. 1999. The Malaysian State's Response to Migration. *Sojourn* 14(1): 178–197.

Pye, O. 2013. Introduction. In *The Palm Oil Controversy in Southeast Asia: A Transnational Perspective*, edited by Pye, O.; and Bhattacharya, J., pp. 1-18. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.

Pye, O.; Daud, R.; Harmono, Y.; and Tatat. 2012. Precarious Lives: Transnational Biographies of Migrant Oil Palm Workers. *Asia Pacific Viewpoint* 53(3): 330–342.

Ramasamy, P. 2004. International Migration and Conflict: Foreign Labour in Malaysia. In *International Migration in Southeast Asia*, edited by Ananta, A.; and Arifin, E. N., pp. 273–295. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.

Riwanto, T. 2004. Cross-border Migration in Indonesia and The Nunukan Tragedy. In *International Migration in Southeast Asia*, edited by Ananta, A.; and Arifin, E. N., pp. 310–330. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.

Saravanamuttu, J. 2013. The Political Economy of Migration and Flexible Labour Regimes: The Case of the Oil Palm Industry in Malaysia. In *The Palm Oil Controversy in Southeast Asia: A Transnational Perspective*, edited by Pye, O.; and Bhattacharya, J., pp. 120–139. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.

Shawaluddin, W.; Hassan, W.; Omar, M. A.; and Mahmood, A. M. 2011. Undocumented Workers in Sabah Plantation Sector: by Force or by Choice? *BUMANTARA Journal of Social and Political Development* 1(1):

127–140.

Soda, R.; and Kato, Y. 2020. The Autonomy and Sustainability of Small-Scale Oil Palm Farming in Sarawak. In *Anthropogenic Tropical Forests: Human–Nature Interfaces on the Plantation Frontier*, edited by Ishikawa, N.; and Soda, R., pp. 357–374. Singapore: Springer.

Soda, R.; and Kato, Y. 2023. The Employment of Indonenians on Oil palm Smallholdings in Sarawak, Malaysia. *Space, Society and Geographical Thought* 26: 19–30.

Soda, R.; Kato, Y.; and Hon, J. 2016. The Diversity of Small-scale Oil Palm Cultivation in Sarawak, Malaysia. *Geographical Journal* 182(4): 353–363.

Stahl, C. W. 1999. International Labour Migration in East Asia: Trends and Policy Issues. Proceeding Paper Presented at the International Symposium on "New Trends in Migration in the Asia Pacific and Consequences for Japan." Tokyo, 23–26, September 1999.

Wendy, M. 2014. Beyond the Personal in Sambas, Indonesia: Women Working Across Borders. *Critical Asian Studies* 46(3): 405–32.

Wong, D. T.; and Anwar, T. A. T. 2003. Migran Gelap: Indonesian Migrants in Malaysia's Irregular Labour Economy. In *Unauthorized Migration in Southeast Asia*, edited by Battistella, G.; and Asis, M., pp. 169–227. Quezon City: Scalabrini Migration Center.